



男は 痛い



國友万裕

第38回

『花束みたいな
恋をした』

1. 大殺界をどう生きようか！？

六星占術によると、木星人プラスの俺はこれから3年間大殺界である。そんなの真剣に信じなくても、気の持ち方だと言われそうだが、俺の人生ではこれが結構当たってきている。

これまでこの連載で書いてきた通り、俺のジェンダーへの囚われの原点は小学校の時の男根的な女の先生だが、この先生が担任だった小学校の4年から6年までの3年間はまさに大殺界の3年間に当たっている。

その12年後、21歳から23歳にかけて、大学を卒業する頃、ゼミの先生と不和が起きた。元々大学に馴染めないのを一生懸命思い直して4年間頑張ったのに、憎しみの残るような卒業の仕方となった。その後もそのトラウマは俺の人生にずっと影を落としてきている。

その12年後、33歳から35歳にかけては、就職のことで悩んで二進も三進もいかなかった。大学の専任になるのは難しい、しかし、非常勤のままだと辛い、でも転職もしたくない、これまで長年勉強してきたのに、それが無になってしまう。新しい生き方を探そうと、男性運動に関わることになるのだが、どこか俺が期待していたものとは違っていた。あの当時も混乱の最中だった。しかもこの時期、父が死に、上の弟が死んだ。母も相当苦労していた時期だった。

そしてそれから12年。45歳から47歳にかけては、今度は単著を出す時の産みの苦しみだった。まず、京都のある出版社へと申し出た。そこは知り合いの先生たちが本を出されているところなので、推薦もしてくれた。しかし、「私たちのところはもうあのシリーズをやめようと思っているので」と一つ返事で断られてしまった。別の京都の出版社に掛け合うと、原稿を読んで、会議にかけるのに1ヶ月ほどかかると言われた。それで、その出版社の返事を1ヶ月待ったのだが、答えはアウト。

「内容的には面白いのですが、私たちのところは

教科書が中心なので」と言われた。

何よりも困ったのは、この出版社と限らず、自費出版の場合であっても、出版を会議で決定するには1ヶ月くらいかかることだった。それに、他の出版社と二股をかけることができない。したがって、1ヶ月待って、アウトだったら、またその時点で他の出版社に当たらざるを得ず、アウトが続く場合はいつになるかわからない。苦しかった。これじゃあ、いつまでも決まらない。

思い出しても、つらい経験ばかりだ。あれとまた同じ運勢がやってくる。怖い。

もちろん、その全てが俺の人生にとっては苦しいけれど大きな転機となった出来事ではあった。ジェンダーへの囚われがなかったら、今の俺はない。あの時、大学の先生との不和がなかったら新たな出会いは起きていない。あの時、就職のことで悩んで、男性運動に参加しなかったら、中村正さんや伊藤公雄さんとの出会いもない。そして、本も京都の出版社で断られたからこそ、ある東京の出版社に頼んで、これが大成功だったのだ。素晴らしい出会いだった。♪涙が乾いた後には夢への扉があるの♪と昔、斉藤由貴が歌っていたけども、先の展望が見えない苦しみを味わった後には必ず、何かが開けてくる。

だから、これから3年後には新たな転機が訪れて、俺の人生もう一皮むけるのかもしれない。だけど3年間は暗中模索、五里霧中を生きていかななくてはならない。それが憂鬱なのだ。

2. アラ還になって思うこと

この原稿がアップされる頃には俺は57歳になっているはずだ。

この頃、芸能人やスポーツ選手など著名人の訃報がネットに出ると、必ず年齢を確かめてしまう。80代、90代ならまだいいが、70代となった場合は若いなあーと思ってしまう。昔の俺だったら60代であっても相当な年寄りを想像していた。しかし、自分がアラ還になってくると70代で死ぬとな

ったらあと20年もないという気持ちになってくる。20年前の俺は、男性グループと上手くいかなかった、傷心気分だった。あの頃のことは今振り返れば昨日のことのようだ。あと20年なんて瞬きのように過ぎて行くだろう。渡瀬恒彦まで生きるとしたらあと14年、渡哲也まで生きるとしたらあと21年、高倉健まで生きるとしたら26年、森繁久彌まで生きるとしたら39年。俺はどこまで生きていくことになるのだろうか。

この頃死後の世界を考えるドキュメンタリーを見たり、本を読んだりしている。俺は何事も心配性なので、早くから死ぬときの準備をしなくてはとってしまうのである。

シュタイナーの理論によれば、人間の意識は、死後は形を変えた意識となって存在し続け、輪廻再生するのだそうだ。俺も誰かの生まれ変わりののだろうか。そうなれば、魂は不滅なのだが、これはこれで怖い。意識がずっと存在するのならいいが、輪廻再生となると、他の人間になるわけだから、自分が無になってしまう。それが怖いのだ。もう一つの自分が霊界に生きていて、そこで今の俺の姿を見ていると思いたい。そうすれば、輪廻再生してもそれが生き続けるわけだから、自意識が無になることはないのだ。

俺はこの宇宙の中で考えれば、本当に粒にも満たないような存在だ。また何億光年にわたる人間の歴史から考えても個々の人生なんて本当に一つの原子にも満たない。大きな視点から考えた場合は、俺の人生なんて、本当にとるに足らないものだろう。

むしろ、この世は、あの世へ行くまでの準備段階という考えもできる。俺たちは宇宙の粒子ほどのことも経験できずに一生を終えていく。あの世に行ってから宇宙のミステリーがわかっていくのではないか。そう考えると死ぬことも怖くなくなるだろう。しかし、怖い。

人間っていうのは思っていたほどには成長しないものだ。俺は若い頃、歳をとっている人は人格ができていて、もっと人生を諦観しているのかと

思っていたものだった。しかし、実際には決してそんなことはない。これまでの俺のトラブルを振り返ってみても、諦観していない年長者たちを過剰評価していたことが、トラブルの元になっている。

小学校の先生も、大学の時のゼミの教授も、社会運動で出会った人たちも、全て最初から大した人じゃないのだと割り切ってつきあっていれば、その後失望を味わうことはなかったのだ。世の中は善意になんて満ちていない。歳をとっても、人格者になんてなれない人の方が多いのだ。

それに人生の限られた時間では人間は狭い世界しか知らずに終わってしまう。俺はまだ10代の頃のトラウマを癒せず苦しんでいる。俺の10代、20代、30代、40代、50代、今振り返れば、全て一本のラインで結ばれている。それはジェンダーに対する囚われだった。人間の人生にはそうそうたくさん出来事が起きるわけではなく、大きなテーマにまつわる出来事を繰り返し反芻しながら過ぎて行くものなのではないか。この頃そう思うのだ。

もちろん、その中で、小さなテーマや小さなラインはいくつも形成されていく。

春休みになって、生活のリズムが午後3時になっている。3時になると毎日東京のコロナ感染者数の速報が出るのだ。その数字を見て、少しずつ肩を撫で下ろす日々が続いている。数字は確実に減って入る。日本だけじゃなく、全世界的にも減っている。今度こそ、収束へと向かうのかもしれない。それを心待ちにしているのだ。

春休みになると時間が過ぎない。いつだって何かを考えている。でも歳をとって仕事ができなくなったら、こういう毎日がずっと続いていくだろう。年取ると今よりももっと何もすることがなくなる。57歳になろうとする今でさえ、死ぬことの恐怖に怯えているのに、実際に80代になったら俺は平常心で生きることができるのだろうか。それともそれまでには死を達観できるようになるのか。

「死ぬ時のことを考えるよりも生きている間を

十分に生きればいいのよ」ともうじき83歳の母は言う。「死んだら自然に帰るんだよ」とお世話になってきた70代の男の先生はおっしゃっている。心療内科の先生も70代になって、まだバリバリに仕事をなさっている。いつ死ぬかわからない年齢になって、そのことを毎日気にやむのではなく、ある日、突然ぼったり死ぬのが本望と思っている人が多いようだ。人間なんて、みんな一度は死ぬのだから、それを悲観的に考えても意味がないと思っっているのだろう。

しかし、俺はそう考えることはできない性分なのだった。

先日、ミニドックを受診した。これは毎年夏休みに受診しているのだが、去年はコロナのせいで行かれず、年度末が近づいてきた2月の受診である。

正直なところ気が重かった。何かとんでもない病気が見つかったとしたら・・・。この頃また悲観的になっていて、悪い方に考える癖が戻っている。

実家の近くの薬屋のおばさんは膵臓癌で亡くなった。

前に『君の膵臓を食べたい』という映画があったけど、膵臓癌の場合はまず治らない。今は癌でも治るケースが増えているが、膵臓癌の場合は見つかった時にはもう手遅れになっているケースが多いと聞いている。そのおばさんも病院でいきなりホスピスを勧められたのだそうだ。もう死ぬのは決定的だから短い余生を心安らかに生きることを医者も勧めるのだ。

俺は今のところ食欲もあるし、痩せてもいない、元々体が弱いわけでもないし、膵臓癌ということはないだろう。

しかし、体は徐々に弱っているのである。

この頃困っているのは尿である。神経質なので、前から頻尿ではあったのだが、この頃は尿意があるのにトイレに行ってもおしっこが出ない、出が悪いという状態になってしまっている。

ミニドックの検診の先生にそのことを話すと、

「年齢的にそういうのが出てきそうな時期ですよ」と言われた。ネットで調べてみると、70代になると男性の7割くらいがそういう問題を抱えるのだそうだ。俺の義理の叔父は前立腺癌だったのだが、癌と診断された後も相当長く生きていた。だから命に関わるものではないにしても、やはり辛い。

近所の薬局で尿の出をよくする漢方薬を買った。俺は便秘の漢方薬も飲んでる。薬代が結構かかってしまう。

最近になって、体の調子を整えるために鍼灸にも再び通い始めた。今回のところはFBの友達がすごく効き目があると書いていて、近所ということもあっていくことになった。

俺の身体を見た先生からは、「これだと普通に生活しているのも辛いでしょう」と言われた。

鍼灸といってもいろいろな流派があるのだろう。この鍼灸院では、1回鍼を刺されて、そのあと20分くらいほっておかれる、それからまた別の部分に鍼を刺してまた20分。それだけのことだ。

それだけのことなのに心なしか体の状態がいい。毎週来てもらっているマッサージも1回は抜かしても大丈夫だった。

1週間後に再びその鍼灸院に行くと2回目も同じ施術だった。そして3回目も同じ施術。徐々に猫背も良くなってきているように思えた。

「また、1週間に1回くらいでいいですか」と聞くと、「だいぶ良くなってきたから2週間に1回で構わないと思いますよ」と先生から言われた。

この言葉を聞いて、この先生、腹黒い人ではないのだなあとと思ったものだった。できる限り頻繁に来させるために状態を長引かせるところもあるのだが、この先生はそう言う人ではないようだ。

おしっこが近い、背中が痛いのはこの鍼灸と漢方薬でマシになるかもしれないと希望は出てきた。俺は映画を観に行くと必ず、途中で一度はトイレに立ってしまう。そのため出やすいように、いつも端っこの席をキープする。

頻尿の原因の一つは普段の俺は水を飲み過ぎて

いるからである。水はいっぱい飲んだほうが体にいいと聞いているからなのだが、当然、水を飲むとトイレにも行きたくなる。昔は映画なんか見るときは水なんて飲まなかったものだ。昔はペットボトルもなかったし、そもそもお金を払って水を持ち歩くような時代ではなかった。

俺は火照り症なので、冬でも冷たいものを飲んでしまい、これもトイレが近くなる一因となっている。コーヒーをアイスからホットに変え、水をお茶に変えれば、頻尿もマシになるだろう。これからはそうしよう。

持病の正常眼圧緑内障は、発見してから15年だが、その間加齢のせいで多少は悪くなってはいるものの、相当悪くなっているわけではない。まだまだ大丈夫だ。

鼠径ヘルニアが痛いのが問題だが、これも多少、気をつけていけばマシになるだろう。食生活と生活のリズムを改善しなくてはならないのだ。

ボクシングジムでは縄跳びを100回跳べるようになった。57歳の割には元気だ。あと30年くらいは生きていられるかもしれないのだ。

そう考えれば、まだまだ人生に前向きにならなくては！ 後ろ向きの人生で30年も生きるのは辛い。クリント・イーストウッドや山田洋次みたいに90ぐらいになってまだ現役の人もいるから、俺の人生だって、まだまだ捨てたものではないかもしれないのだ。

3. 生活を狭める。

今年に入って生活するための現金がないことに気づくようになった。貯金はあるにはあるのだが、おろしたくない。老後の蓄えだからだ。

お金がない。これは不思議なことだった。この1年はコロナでどこも行かれなかったため、実家にも帰っていないし、東京にも行っていない。友人と会う機会が減ったので、外食代もそんな使った覚えはない。パソコンも買っていない。なぜ、なのか。

とりあえず、これからはお金を節約して、生活を狭めなくてはならない。先日、映画館で80くらいのおばあさんが掃除の仕事をしているのを見て、痛々しくなったものだ。高齢の人が、お小遣いのためのバイトをしているのであればまだいいけど、生活のために仕事しなくてはならないのだとしたら、大変なことだ。本当に人生は切ない。死ぬ間際まで現実に立ち向かい、人間は仕事することになるのだろうか。

俺は80くらいになったら、体を労って余生を暮らしたい。しかし、収入がなくなるわけだから、そうそうお金も使えない。節約した中でやっていくしかないのだ。これからはその準備もしていかなきゃいけないのだった。

まずはコンビニに行く回数を減らして、スーパーに移行しよう。スーパーで買い物すると千円でこれだけ買えるものなのかと感嘆してしまうことがある。コンビニに慣らされているからレジに並ぶのが面倒だけど、それくらいはできる心のゆとりを持たなくてはならない。

映画も映画館で見る回数は減らし、レンタルも減らして、NetflixやAmazonプライムで見る本数を増やさなくてはならない。配信だといつでも見ることができるため、あまり真剣に見ない。映画館やレンタルでお金を払って見た方が真剣に見ることは事実なのだが、それくらいは妥協しなくてはならない。

買い物の時のポイントもできる限り、つけてもらうことにしよう。俺はお店などでカードにポイントをつけてもらうのは面倒臭いと思う性格なので、ポイントを集めようとしなない。しかし、そういう小さい節約が後では大きいという話も聞く。

それに、できる限り頻繁に預金残高をチェックしなくては！「乗るだけダイエット」という言葉がある。ヘルスメーターに乗るだけでも、常に体重を意識しているからダイエットに効果があるという意味である。お金に関しても、「見るだけ節約」と言えるだろう。常にお金のことを意識して毎日残高を見ていれば、少しずつ失費のコントロ

ールが効いていくに違いないのだ。

4. 女性嫌いを治すには・・・

そして俺のこれからの人生のテーマは、女性への偏見を溶かすことである。

俺はこれまで何人ものカウンセラーについてきたが、中でもとりわけ大きく俺にとって有益だったのは25年前に出会ったゲシュタルト心理学のカウンセラーの先生だった。この先生は、アメリカ仕込みで、ただ単に話を聞くのではなく、問題にグッと向かい合わせるカウンセリングだった。

その先生に俺の悩みを話すと「アバウティズム (Aboutism) やめてんか！」とおっしゃっていたものだった。すなわち、俺の思い込みは、俺の思い込みであって、それを一般化することを止めようとなさっていたのだ。例えば、不登校について、社会について、これまでの経歴について、俺は全て悲観的に考えていたのだが、それはあくまでも俺のそれに「ついて」の考え方であって、実像は違っているのだということをはっきりとさせて、俺をサポートしようとしてくれたのだった。

俺は、この先生を尊敬しているし、感謝もしている、この先生のおかげで自分にある程度は自信がついた。しかし、この女性に対する偏見の部分だけは、この先生の理論でも無理だった。

俺が一人や二人の女性からトラウマを負わされたというのであれば、女性すべてについての問題ではなく、その女性の問題であるということになるだろう。しかし、俺は、小学校や中学校の頃だけではなく、何段階にも渡って、女性に痛い目に遭わされている。とりわけ因果なのは大学入学の時英文科を選んでしまったことだった。

大学に入る頃の俺は本当に前向きになっていた。物事をポジティブに考え、全力に生きようと意気込んでいた。それまでの苦しい不登校時代を一掃しようと思っていた。しかし、よりによって、俺のクラスは女の子が7割。俺は女性から嫌われる男であることは自覚していたので不安だったが、

それも前向きに捉えようと思っていたのだった。

しかし、現実はその甘くなかったのだ。入学して半年くらい経って、秋くらいになると女の子たちの悪口陰口が始まった。

この話をすると、俺が悪縁を引き寄せているという人もいる。俺がネガティブな目で女性を見ているからネガティブなものを引きつけるのだと言う人いる。しかし、この当時の俺は意気込んでいたし、女性に対しても偏見なく、目一杯親切に振る舞っていた。なのに、それが起きたのである。

他の学部だったら当時は女性は少なかったからここまで女性嫌いが長引くことはなかったのかも知れない。しかし、人生に「たら・れば」はない。英文科に行っていなかったら、今の仕事はないわけだし、これはもう宿命としか言いようがないだろう。

事故に遭いやすい人、病気になりやすい人、お金の恵まれない人、男運の悪い人、さまざまな宿命を人は背負っている。俺の場合は女性から嫌われる、気持ち悪がられる、傷つけられる、そういう宿命を背負って生まれてきたらしい。

俺の中では女性はおっかない存在として概念化されている。幸せを奪う存在として位置づけられている。そういう女性ばかりではないのだろうが、出会う女性はそういう女性である可能性もあるのだ。

俺は一生、性的不能者のように生きていくしかないのか。

いや、ここで **Unlearn** を学ぶことを考えてもいいだろう。もう一度物心つく頃の子供に戻って、全てを学習しなおす。これまでの人生経験で学んでいたことを **Unlearn** (捨て去る) ことが、今の俺には大事なのだ。

まずはジェンダーをしばらくは忘れるべきだろう。俺はこれまで長い間、ジェンダー研究に没入して生きてきているので、女性の些細な一言が許せない。些細な態度に過敏に反応してしまう。筋金入りのフェミニストだったらまだしも、大抵の人はジェンダーを深く勉強しているわけではない

ので、当然彼女たちのジェンダーに関する意識は整合性が取れていない。ジェンダーを毎日考えて生きている俺は、男だったらこんなことは言わない、こんなことはしない、女だから許されることだ、だからあなたは女の特権にふんぞり返っている、だから女性は許せないという考えへと陥っていく。

理詰めで女性を見るのをやめないことには女性嫌いは治らないのだ。

それがわかっている、「言うは易し、成すは難し」である。

しばらくはジェンダーの眼鏡を外して生きなくては！と思っていた矢先に『ファーストラブ』という映画に出会ってしまった。

(ここからはネタバレがあるので、映画をまだ見ていない人は注意してもらいたい。)

俺は、この映画の冒頭の15分くらいを見た時点で、性的虐待の話であることはピンときた。父を殺してしまった女の子の話なのだが、彼女が幼少期に父からひどい虐待を受けて、その結果心が壊れてしまっていることが徐々にわかっていく。その後遺症で、彼女は男の視線を感じるたびに昔のトラウマを思い出してしまい、そのことが彼女を常軌を逸脱した行動に導いていくのである。

映画を観ながら、「あなたの気持ちはわかる。でも、俺だってそうなんだよ」と言いたくなった。俺だって、子供の頃のトラウマのせいで女の視線が怖い。しかし、男の場合はその苦しみを認めてもらえない。

この映画と同列の映画はたくさんあって、むしろこの頃は幼児期の性的虐待の話は量産されている。その一方で男がトラウマを負わされるという話はあるだろうか。男の場合だと『闇の子供たち』のように加害者も男というケースが圧倒的に多く、女性の加害が描かれない。描かれたにしてもそれが話の中心にはならないので、なかなか目の目を見ることがないのだ。いつになったら、わかってもらえる時代になるのやら。もうわかってもらえないと割り切るべきなのだろうか。

橋本聖子のセクハラ問題がマスコミを賑わしているのはある面好ましいことだ。女性でもそういうことをする人がいるのだと言うことを世間がわかってくれば、男の方も摘発しやすくなる。

女性を貶めようと思っているのではない。男でも女に傷つけられる被害者はいることを認知してもらいたいのだ。

5. 『花束みたいな恋をした』(土井裕泰監督)

あまり食指の動かない映画だった。

先にも書いたとおり、俺はほとんど恋愛というものをしたことがない。女性が好きではないので、とっくに恋愛は諦めていきってきた。アメリカでMGTOWという男性グループがあるという。恋愛や結婚は男にとって不利益だから、そういうものを避ける男たちのグループである。まだ詳しいことは知らないのだが、こういうグループができたことは俺と似た考えの男性が世の中にいるのだ。俺はほっとした。

この映画で、菅田将暉と有村架純が恋人になるまでのプロセスは極めて今風である。まず、菅田の方がお金を払うわけではない。彼の方が彼女に料理を作ってあげたりする。彼は焼きおにぎりを3つ作るのだが、2つ彼女が食べて、彼はひとつしか食べない。昔だったら逆だろう。昔風の男女関係には囚われていない。

しかも、この二人、彼のアパートで一晩二人きりでいながら、即セックスをするわけではない。これも今らしい。昔だったら一人暮らしの男のところに行って、しかもそこでうたた寝なんてしたらレイプされるところだが、菅田が演じる男子はそういうことを最初からしたいとは思っていない。有村の方も不安を持っていない。今の男は草食系。もはや男は狼ではないのだ。

その後も一貫して、ジェンダーは強調されない。どちらがリードするわけでもなく、二人の恋愛は進んでいく。

ただ、途中、彼がそれまでのイラストレーター

の暮らしを諦めて、営業職のサラリーマンになるところから二人のすれ違いが始まっていく。彼の方は仕事人間へと陥っていくのだ。

これは生物学的な問題なのだろうか。男は1つのことしかできない。それまでは5時から後はイラストレーターを続けると思っていても、いつしか男社会の一因へと組み込まれていくのだ。

あれこれあった後、結局、二人が別れるところで映画は終わる。憎しみ合う別れではなく、お互いのことを考えて、前向きに別れる。今は一過性の恋であってもそれが自分の人生にとってプラスの経験なのであれば、それでいいと割り切る若い子が多いのだろう。今は駆け落ちとか心中とかする時代ではない。愛は盲目というのはもう古い。理性的で友愛に満ちた恋愛。これはなかなかいい傾向だ。

また世の中キャラ分けが進んでいることもわかる。映画のディテールとして、スペシフィックな作家や映画の名前が出てきて、万人が知るものは無くなっている。

着実に世の中はいい方向に進んでいるようだ。俺もまだまだ生きていく価値はあるのだろう。

俺の人生は10代がどん底で、その後尻上がりの人生。今はボクシングジムでシャドーボクシングをするアクティブな初老のおじさんである。ボクシングジムのトレーナーの子が、一緒に誕生日を祝ってくれることになっている。

今は幸せ。これから女性嫌いだけはどうかしなくてはならない。それが今後の目標である。